

||||||| 紹 介 |||||

## 資本論と準備手稿

見 野 貞 夫

資本論第1巻出刊百年を記念して以来、ここ数年間にその創作のいきさつを既刊・未刊の手稿とくらべていろいろな視角から丹念にフォローする高い水準の研究業績をわが国はすでにもっており、それはソ連の同種のものに優るとも劣らぬしっかりした成果である。今回、マルクス・エンゲルス全集中の、61～63年の未公開手稿を含む第47巻のロシア語版がソ連で出刊をみた機会をとらえて、この手稿と資本論との関連に焦点をしばって、資本論創作史の一角をフォローしようとする簡単な概説論文—これを、以下とりあげてみたい。それは、内容的な論定ともども、このあたりのソ連の問題点やその研究状態をうかがう—材料ともなるであろう。

最近、1861年～63年にかけてマルクスが書きのこした膨大な量の手稿のうち、その最初の部分がマルクス・エンゲルス全集ロシア語版第47巻として発刊公開された。同一手稿の第2部分は“資本論”の結巻（草稿第4部）として同全集26巻（I～III）に印刷収録されている。なお第3部分は48巻として公刊予定である。

この点を、フェドセーフ<sup>①</sup>によって、いますこし補足すると、次のようになる。

既刊のM—E全集39巻を補足して、追加的に、アカデミー経済研究所はな

---

① П. Федосеев: Экономическая наука: некоторые задачи ее развития, Вопросы Экономики, No.2 1974.

お 11 巻出刊してきたし出刊中である。このなかではほぼ 2/3 はロシア語による経済学作品を含む。いちはやく外国語で出刊をみたのも部分的にはあるけれども、一般に、これは公刊されなかった手稿である。“経済学批判要綱”というタイトルで周知の 1857～59 年の手稿は第 46 巻（I～II）におさめられている。47 巻には、61～63 年の経済学手稿のほぼ半分が資本論の最初の変型としてはいっており、あとのこりのもう一つの半分を含み、“要綱”の続巻として経済学体系構成を完結するのが 48 巻であるはず。

更にかれにしたがえば、資本論第 2～3 巻の資料をなす 63～65 年の手稿は目下、同研究所が保存している。かくもゆたかな遺産のすべてがすべて、発刊にあたりその準備のためにエンゲルスによって利用されたわけではない。それゆえに、いずれ陽の目を見るはずの 49 巻～50 巻には経済学作品がもりこまれるはずであり、とくに資本論第 1 巻フランス語版も発刊されることだろう。すくなくとも抜粋は含まれよう。もともと、フランス語版は、マルクスもいっているように、独自の意義を有する。けだし、マルクスはこれを学ぶことをすすめたのは周知のところだからであり、また他国語での訳刊にさいしても、これを照合するよう求めたためである。内容においても、タミノロギーの意味についても、かれがこのほん訳を細心に他からきりはなそうとしたことも、これに関連するのだろう。残念なことに、経済学者はこの版に注意を向けない。フランス語版は特別な研究対象ともいうべく、理論解明にとって重大な意義をもつこと。

だが、日本ではすでにこの方向づけは一部の論者ながら、先駆的にはたさられている。

1859 年 6 月に、“経済学批判”第 1 分冊がでたが、ヴィゴットスキーもコメントしているように<sup>②</sup>、マルクスはそのはしがきで、当初のもくろみとして、全 6 分冊から成る経済学作品たる構造を明らかにする。いまさらいうまでもないことながら、そこでかれは、資本、土地所有、賃労働、国家、外国

---

② В. Выгодский: Из истории создания “Капитала” К. Маркса, Вопросы Экономики, No. 2 1974.

貿易、世界市場の順序で考察し、資本について論ずる第1巻最初の部分は1.商品 2.貨幣もしくは単純流通 3.資本一般より構成されるのであり、前2章は本分冊の内容だとマルクスは説明した。そして資本についての第1分冊は、資本一般、競争もしくは多数資本家の相互行為、信用、株式の4部分に細分されていた。資本一般はすでに当初第1分冊に入れる予定であった。58年1月、第1分冊用手稿を印刷所に送付して、エンゲルスへの書簡でこういった。12葉の手稿(3冊分)として、たしかに表現は資本一般であるものの、そのノートには何一つ資本はないのだと。第1分冊と同じように、第2分冊用の資料も57~58年に書かれた手稿をもって役だてた。61年夏、第1分冊発行後、2年をへて、かれは、第2分冊にとりかかり、その手稿の資本部分のよみなおしから、この作業をはじめた。2年の中断は、健康不良と物質的困難を別にすれば、60年発刊された“フォグウト氏”の仕事のためであった。61年10月10日のエンゲルス宛への書簡でマルクスは第2分冊の作業が開始されたと告げている。ともかく、かれは中断を埋めるべく、“私自身への注記概要”といった索引をつくり、これにもとづいてその分冊の基礎となる資本一般という第3章をくわしくプランした。ところで〈概要〉、〈第3章プランスケッチ〉、〈批判〉は第46巻に収録されているが、47巻出刊準備の過程でB.K.ブリシュリンスキーのおこなった記述時期の訂正には着目したいものである。それによると、〈概要〉と〈スケッチ〉は1861年夏に作成されたもので、以前に考えられていたように、59年の2~3月ではない。57~58年手稿と61~63年手稿との間には、過去に説明されていたよりも、いっそう緊密な関係があるので、第47巻作定にこの訂正はきわめて重要であった。両者は資本論創成史における二つの期間の媒介環として位置づけられるだろう。

マルクスの手稿を、生存中にでた“経済学批判”や存命中でないがこの全集におさめられた部分などとの関連で、二人の論者の整理を通してみてきたのである。が、その手稿内容をいま1861~63年のもの、つまり新刊の第47巻にしぼって考察検討し、現行資本論と対比しているヴィゴットスキーの論文

を、以下紹介してみたい。それは、1.1861～63年の資本論構築の作業、2.1861～63年手稿部分の出刊がマルクスの経済学遺稿において占める位置に2分して考察するが、これを丹念に以下フォローしていこう。

1. 61年8月から63年7月にかけてマルクスの書いたこの手稿は、最初の既刊部分と同じく、〈経済学批判〉と名づけられているが、サブタイトルが〈第3章資本一般〉となっている。資本一般(Das Kapital im allgemeinen)という範疇は、57～58年手稿ではじめてでてくるのであるけれども、それにしたがって規定すると、〔個別一筆者の挿入語〕特殊な資本と相異って、資本一般とは、1.ともかく抽象的にあらわれる。……だがそれはすべての富形態あるいは(社会的)生産の仕方と相異った資本の種差(differentia specifica)を把握するような抽象である……。2.しかしながら、資本一般は特殊な現実の資本と区別される現実的存在をもっているのだと。もう一つほかのところでも、マルクスは曰く。すなわち、ある国民の総資本を考えるならば、もしくは全経済的基礎として資本を考えるならば、それは資本一般を考えていることになるのだと。この範疇はかれの経済理論発展にとって重要な役割を演ずるのであって、これを分析していった過程において、かれは57～58年手稿ではじめて、資本一般の組成構造に到達し、資本の1.生産過程、2.流通過程そして3.両過程の統一もしくは資本と利潤に分けたのである。その結果、この区分は資本論のあらゆる理論部分の構造に介在することになり、61～63年手稿をつくるのにも指針とした。さきのスケッチ中でもこれは採用されている。

通しナンバーで23分冊のノートから成る61～63年手稿を、マルクスは次の3段階でつくりあげた。

第1段階。61年8月からほぼ62年1月までの間の、経済学批判第2回公刊準備の進行中に、かれは最初の5分冊のノートを書きみたしたが、そのノートは後に、資本論第1巻でいっそう仕上げられる問題、すなわち貨幣の資本への転化、絶対的剰余価値、そして相対的剰余価値などの問題が考察されていた。62年1月ほぼ、手稿ノートVの210または211頁に、マルクスは、機械の資本制的適用を叙述する編を中断して、ノートVIを開始し、ブルジョア経済学の詳細な批判的分析——剰余価値学説に移っている。その学説の検討は61～63年手稿のノートVIからXVまで

を占めるわけである。

ところで、経済学批判続編の出刊を何ゆえにマルクスが中止したかという点である。明らかに、自分の経済理論を完全に作成し、57~58年手稿でくわしく分析した“ふかい”範疇——価値や剰余価値から、ブルジョア社会の表面に登場してくる平均利潤、生産価格、地代といった範疇へ移っていく必要性に想到したからである。後の1893年に、エンゲルスのいうには、剰余価値論をマルクスは独力で開発していたが、そのいきつく結論が自分に判然としないかぎり、公表を執拗に拒否しつづけたのであり、これが続編の発刊を中断させた大きな原因であると。がいして、利潤を剰余価値の転化形態としてとらえる考え方はすでに57~58年手稿にみられるが、さまざまな生産部門において個別利潤率が必然的に相異となっているという結論にいたった。部門間競争の結果、それは均一な利潤率になること、あるいは生産価格論にも到着していたけれども、このくわしい仕上はいまだ与えないままであった。同じ状態は再生産論、恐慌論、そして生産的労働論といった理論分野にもあてはまる。

第2の段階。こうした諸理論はブルジョア経済学の批判分析で作りだされる。その時期がこの段階であり、62年1月から11月までの間がこれである。この手稿部分は内容上、資本論の史的部分（第4部）としての剰余価値学説であり、スケッチ部分であるにすぎない。マルクス死後、1883年以来、ずっとエンゲルスは資本論の第4部として剰余価値学説史を公版する旨を発表してきたが、果せず、ソ連では今世紀にはいって1954~61年になってやっと公開、この発刊は完結するのである。もっとも、これにさきがけてすでに1905~10年にカール・カウツキーがこれをだしているが、この場合、資本論第4部としてではなく、資本論に平行した作品として処理された。

第3段階。62年11月からこの段階ははじまる。当時、結びのテーマ剰余価値論——〈収入とその源泉〉、〈俗流経済学〉といった手稿ノートXVの作成過程において、きたるべき資本論第3巻と第2巻の問題設定に、つまり貸付資本、商業資本、利潤資本制再生産などの分析に、かれはたち向っていた。62年11月から63年1月の間がそれに当たり、手稿ノートXVからXVIIIが書きあげ

られたし、62年11月から63年5月にノートVの結びの部分が。はたまたノートXIXとノートXXでは、中断した機械の論説にたち戻り、仕上をほどこし、その後、絶対的剰余価値と相対的剰余価値を、両者を統合して論じる問題点を研究したのである。最後に、ノートXXI～ノートXXIIIは、63年5月～7月にうめられたが、剰余価値論に接合する評注と相ならんで、資本論第1巻と第2巻の問題設定にかかわる諸編をば内蔵していた。たとえば、〈労働の資本への形式的ならびに実質的な従属〉、〈剰余価値の資本への再転化〉、〈いわゆる本源的畜積〉、〈単純再生産過程〉など。

1862年、末もおしつまった28日付でルードヴィヒ・クーゲルマンへの書簡で伝えたように、マルクスは重大な決定を下すのである。曰く。

「お手紙をみて、あなたやあなたの友人たちが、私の『経済学批判』に熱心な関心をお寄せになっていることがわかり、たいそううれしく思いました。第2部はいまやっとできあがったところです。つまり、印刷するために清書し最後の仕上げをするところまでできています。ほぼ30印刷ボーゲンになるでしょう。これは第1分冊の続きですが、独立して「資本」という表題で刊行され、「経済学批判」というのはたんなる副題となります。事実、それは第1部第3章をなす予定のもの、つまり資本一般をふくむだけです。ですから、諸資本の競争や信用制度はそれにふくまれていません。イギリス人が「経済学原理」と呼ぶものがこの巻にふくまれます。これは（第1部のものとあわせて）核心的部分で、これに続くものの展開は（たとえば社会のさまざまな経済構造にたいするさまざまな国家形態の関係などをのぞけば）ほかのものでもすでに与えられているものを土台にすれば容易になしとげられるでしょう……

ドイツ語の本が出たらすぐ、フランス語訳がパリで手がつけられる見込みは十分あります。自分でフランス語にする時間は全然ありません。まして私はこの続編つまり資本競争および信用の叙述の結びをドイツ語でかくかあるいは最初の2作をイギリスの読者用に1冊まとめるか、どちらかにしようと思っているのですから。……」（大月書店全集版：30巻）

この書簡は、マルクスが資本一般という編の問題設定にいつそう集中しようとした企図、すなわちみずからの経済理論の肝心な基礎を作成しつづけようとした企図を鮮明にするものだろう。かれのもとでは全4巻から成立する資本論を書く新しいプランがめばえたのであるが、そのうち最初の3巻は以前に考えた資本一般の3組成の構造を再生するものであって、第4巻は理論の歴史。1863年1月にマルクスの編成した資本論1～2巻のプラン、また63年8月15日エンゲルス宛の書簡はこれを証明する。そこでかれははじめて、資本論の史的部分について語っている。その書簡からはさしあたり、次のことが結論できよう。すなわち、かれは3部プランで新手稿の作定に着手、それを印刷用の最終稿と考えていたこと。こうしたプランが61～63年手稿仕上の時期に生じてきたのは不思議でない。けだし手稿ノートの例の概要が示しているように、それはまったく内部編成に一致していて、手稿は全4巻の第4(57～58年手稿後の第2)のスケッチであるからだ。今日まで未刊の61～63年手稿中\*今回全集に収録されているのは資本論第1巻の問題設定(資本の生産過程)の資料であって、それはノート(I～V)とノート(XIX～XX)にちらばっていたものである。後者はノートVの直接じかの継続である。

2. 47巻に公表された手稿の主要内容は、後67年公刊の資本論第1巻に体现する。それにもかかわらず、その手稿はマルクスの遺稿中重要な位置を占め多大な理論的史的な関心をそそるわけである。資本論に関する他の未定稿と相ならんで、この手稿はマルクスのあの天才的な作品が作出される過程を明らかにするものであり、ヘーゲルの表現をかりると、“結果と同時に生成”を示して、マルクス経済理論の完全な表象を与える。第47巻の手稿は資本論第1巻へのねうちのある補論である。けだし、後の資本論ではそれほど詳細に叙述されなかったこうした個々の部分的論説を含むからである。このほか、忘れてはならぬことは、マルクス経済理論の全一連の基本的規定がまさにこの

---

\* ロシア語で既刊のものは機械についての二つの断片(Коммунист, No.7 1958, No.7 1968)と Вопросы естествознания и техники (вып. 25, 1968)にある。

手稿においてはじめて定式化をみたという点であろう。これは資本論創出史においていかなる位置をその手稿部分が占めるかを判ずるに十分である。

50年代に仕上った価値論や剰余価値論にもとづいて、マルクスは61～63年手稿で労働関係の分析をつづけ、まずもって資本主義の敵対的矛盾やブルジョア社会における労働者の状態とか闘争に結びついた問題を広汎かつ詳細に検討した。剰余価値を分析して、かれは、資本制搾取の過程、剰余価値生産の過程と、価値法則、等価物交換の法則との間に存在する照応関係をつぶさに基礎づけた。この基礎づけはマルクス剰余価値論の中心にある出発点であり、ブルジョア経済学とも小ブルジョア社会主義とも判然と区別される特質である。かれはいう。〈経済学者は剰余価値と、かれらの確定する等価法則とをけっして融合させえなかった。社会主義はつねにこの矛盾にとりつかれこれにたえず逆もどりしてしまつて、労働力というこの商品の特殊な性格を研究しなかった。労働力商品の使用価値こそまさしく交換価値をつくる活動である〉。

マルクスは労働力商品を全面的に研究し多くの注意を与えた。資本制経済と単純商品経済との商品経済二類型の質的差異を明らかにして、後者の性格を鮮明にした。だが両者を同一視するブルジョア経済学は、剰余価値のなかに、商業のペテン、生産者、消費者間の等価交換の破壊をみるだけであつた。いく人かの人びとは交換が剰余価値の源泉たりえないことを理解したとはいえ、剰余価値を単純な労働過程からどのようにひきだそうとしても、それは無駄なことであつた。57～58年手稿を書きなおして、かれは次のような規定を与えた。〈資本という概念を展開するためには、労働からではなく価値から、したがって流通の運動で発展した交換価値から出発する必要がある。労働から直接、資本に移行することは人種のちがいから銀行業者へ、あるいは自然から蒸気機関へ移行するのが不可能なのと同様に、不可能なのである〉。この規定は他の諸規定にもまして、重要な方法的意義をもつものであり、この特殊な生産方法に内在する経済現象や過程の独自性が現象過程の社会形態を分析することによつてはじめて、分明になるのであつて、物象的な特徴づけか



らではけっしてないのだという点をば示している。資本の敵対形態を捨象したり、その法則をすべての構成体を支配する法則とみたりするのがブルジョア経済学に特徴的。この特徴は、ブルジョア経済学が資本主義の基礎細胞を發展させたり、分析したりすることをどうしても妨害してしまう。マルクスは商品生産や商品価値がその展開した価値形態なり、貨幣のすがたでもって、一定条件下に實際上、資本制生産の起点としてあらわれることを明かにした。〈商品と貨幣はブルジョア経済学を研究するさいに、われわれがもって発足しなければならぬ前提であり…、実際、資本制生産の表面においてのみ、商品は富の原基形態として現象するのである〉。原基的細胞形態の特殊性格に、一定生産様式の特異性の重要な現象形態があるというわけである。だがしかし、資本制生産を商品貨幣関係に帰着しようとせず、むしろその發展段階として、かれはとらえた。〈……資本ははじめから社会的生産様式における一定の歴史過程の成果にして、一定時代の基礎となるにすぎない〉。經濟發展の一定段階においてのみ、貨幣所有者は市場の自由な労働者——労働手段からも人格的従属からも自由にして、販売用に自己の労働力をもつにすぎない労働者——をみいだすのである。

労働力分析にあたって大切なのは、労働力自体と、その消費である労働過程を区別することである。この二つを区別しないと、リカード理論がそうであったように、剰余価値の源泉も解明できぬ。マルクスは労働力を、労働そのものとも、その実現条件とも切はなして、労働の潜在的可能性として位置づけた。これはタミノロギッシュに確定される。すなわち、資本論では労働力 (Arbeitskraft) という用語と相ならんで、労働能力 (Arbeitsvermögen) の用語をも利用している。更に、労働力商品の特殊性を特徴づけて、かれは既刊の手稿において、それが〈個体そのものの生きた身体における能力・潜在性の形において〉存在することをもみとめた。

労働力商品の使用価値は労働そのものであり、経済学がこの過程を研究する必要があるのは、この商品の特殊な使用価値と、使用価値としての実現が経済関係に、経済的形態規定性にかかわるからだと言った。つま

り、労働過程で労働者は人格化された労働力として、それ自体と労働条件とから切断分離されている。〈イギリスでは労働者とよぶのに主要な器官をもってし、その器官を通して労働力は作用するのであるが、まさにその器官として固有な手をもって人手と名づけるのが特徴的である〉。労資の相互関係をマルクスの分析的に分析するさいに、きわめて重要な役割をはたすのが労働力の価値規定と、その貨幣的表現である賃金である。ブルジョア経済学は重農主義以来、労働力価値（“労働の価値”）を、史的発展の程度に依存しない一定不変の数値と考えて、最低賃金の見解を展開してきた。それによると、最低賃金の数値は労働者の生存に物理的に必要な一定組成の生活手段の価値によってつねに規定されるというのである。既刊の手稿ではじめてマルクスが反論を加えたことは、賃金増加と労働時間短縮を求めて労働者が闘争する可能にして必然的なゆえんを、かれに基礎づけさせた。もとより、その価値は、マルクスによると、史的に可変であり、〈いわゆる第1次的な生活欲求の大いさと、それを充足する仕方は社会の文化にいちぢるしく依存しており、歴史の所産である……〉。したがって、賃金決定とともに、労働力の価値決定にあたって、〈議論は極度の物理的必然性にかかわらない……〉。とはいえ、資本主義は實際上、労働力の価値・価格たらずその最低限に帰着させようとする傾向がある。まさにこれより、賃上と時間短縮のうむことなき闘争も制約をうけるのであり、労働者が資本の強盗ばりの侵害と闘うのでなければ、65年の“賃金・価格・利潤”で述べているように、かれらは救いようのないまったくの零落貧民大衆になってしまうのである。そして労働者の闘いというこの見解は、40年代にくらべて60年代ではかれの理論水準が高まるので、そうした高水準に照応している。40年代では、労組といえども賃金を最低限に圧下する競争法則にそう長く耐えうるものではないとかれは考えていたのだ。

資本制生産過程を史的発展のなかで考察しつつ、マルクスは既刊手稿でとくに絶対的剰余価値と相対的剰余価値が対応するところの、労働の資本への形式的従属と実質的従属とを区別、資本の支配下にこれをつかまえる意味の形式的従属は、特殊資本主義的生産方法の創出を前提とする実質的従属以前

にあるとはいえ、その結果たる絶対的剰余価値と同じく、発展した資本主義社会でも保持されると。絶対的剰余価値について、マルクスのいうには、剰余価値のこの形態は絶対的であり、階級対立にもとづくすべての生産方法に内在する。階級中、その一つが生産条件の所有者であり、もう一つが労働の所有者であると。生産に参加しないブルジョア社会の層はすべて、剰余労働によって生き、あれこれの非生産活動をするため、あるいは単に無為のために、物的生活条件と自由時間を入手している。ここである人々の自由時間には、他の人々の法外な労働時間が照応する。〈この敵対に今日まで存在してきた一切の文明と一切の社会発展がねずいている〉。

同時に、かれは剰余労働を〈社会のための労働〉として、いっそうひろく規定した。その労働は一面、社会の自由時間の基礎であり、他面、同時に、全社会発展および全文化一般の物質的基礎である。一切の統計源、まずもって工場検査官の報告——その仕事をかれは高く評価したし、その一人レオナルド・ホナーをかれは博学にして的確な知識でも真理への誠実ぶりでも、等しく特筆すべき人物とみていた——から借用した多量のサンプルにもとづいて、マルクスは資本に内在する剰余労働を求める無限の増加を解明して資本制搾取の恐るべき光景をえがきだす。法外な労働は、労働力の機能する正常な期間をちぢめ、その価値を破壊すると考えた。労働者の消費にはいる生活財の量的減少や質的劣化によって、労働力価値を〈人為的に低めること〉を、かれは指摘した。これと同じ状態がたとえば、弱年労働力の適用や学習費の削減であったことに注意を払われていないと批判し、次のようにいう。〈このようにしてわれわれは、資本に光栄あるプレイをする可能性を付与し、そのもっとも大きな醜行がないなど予想してきた〉。これは全研究にわたり、かれの原則的な問題設定。かれは資本制搾取を、生産関係の本質そのものから説明する。〈資本制メカニズムを客観的に分析するにあたり、それに固有な周知の異常性をもった汚点を利用する必要はない〉。また、生活財の劣化による労働力破壊——これこそ労働力販売の正常条件の破壊である。〈資本制生産は……対象化された労働にたいしてはもっとも節約的な労働としてあらわれる

が……同時に、資本制生産は他のどのような生産方法にもまして、人間の肉体と血、その力ばかりではなく、その知的精神的エネルギーをも消費する。各個人がこうむる損害の代償によってのみ、人間社会の社会主義的組成への序曲となるそうした歴史的時期に、一般的発展が達せられるのである。

資本制生産が直接に関心をもつのはこのあとさき考えぬ殺人——労働階級の法外な搾取である。労働者の組織的な抵抗だけが資本の無法な強要をくだきうるのであって、分裂してはいるこの強要をおさえこむのは不可能である。ともかく労働者の抵抗は欠かせない。曰く——〈労働者それ自体は、階級としての国家に働きかけたり、国家を通して資本に働きかけるのでない限り、かれらの肉体的生活に必要な自由時間を、資本の貧欲な毒牙からもぎとることはとうていできない〉。イギリスばかりか、ヨーロッパ大陸、フランス・プロシア、オーストリアにおいて労働時間の立法的制限をかちとった労働者階級の闘争を、マルクスはこれと結びつけて分析する。工場検査官がその報告で伝えるところによると、結局、イギリス議会が採用し何がしかの搾取制限をめざした工場法の全脱法行為は明かであり、しばしば死文に化したのである。これを、マルクスは必要労働時間への侵害と考えた。検査官も明からさまに率直に、資本家による労働時間の盗みを語った。労働時間規制への〈実地的な抵抗〉と相ならび、弁護論や俗流経済学の理論的抵抗もあった。かれらは時間短縮がおよそ不可能だといったのである。それにもかかわらず、マルクスは、労働時間短縮のこの過程がイギリス労働者階級の肉体的・道徳的・知的な状態改善に与える異常に有利な影響力を統計でうらづけて認めたのである。後、64年、この史実をかれは国際労働者協会創立宣言で書いた。

労働時間の延長による絶対的剰余価値の増加に一定の制限を枠づける労働者階級の抵抗。資本家はこの限界を生産力のいっそうの発展によって克服しようとするが、その結果、必要労働の一部をも剰余労働に転化することが可能になり、相対的剰余価値を高めたのである。この場合、かれらの消費する生活手段の範囲が拡大するけれども、その価値は減少する。生活状態にこのように改善があったからといって、相対的剰余価値の性格や法則に何らの

変化も生じないし、生産性向上の結果、ますます多くの労働日が資本の領有するところになる点で何ごともかわらぬ。だからして、明らかなことは、この法則を統計をもって反論し、あれこれの関係や場所でまるで労働者の物的状態が労働生産力発展の結果として、改善されでもするかのように説明するなど、一切ばかげたことだという点であると。ブルジョア社会において労働者階級が窮乏化するといった現実の弁証法はその自動的なり行きとは、何の共通するところもない。後者は、ブルジョア批判家や改良主義者によりあたかもマルクスの持論でもあるように論じられはするけれども、かれの真意はこの社会において〈労働階級はつねに自分の消費のためにのみ働き、ただ消費費用の大小数値間にだけ差異があるにすぎない〉という点にある。かれによると、〈労働者はそれ自身としての規定性において、貧困者である〉ので、絶対的剰余価値の概念も〈かれの労働力が唯一の商品であるということ以外の何ものを意味しない。そしてその商品をば労働者は販売用にもっているのである〉。こうして、マルクスは、生産性向上と相対的剰余価値増加にひきつづいて労働者による賃金増大のころみに資本が猛烈に抵抗することを認めた。既刊の手稿中でもマルクスは、資本制生産の範囲内で労働生産性向上の3段階をくわしく分析している。3段階とは協業・分業および機械。これは同時に、労働の資本への実質的従属の発展における三つの段階である。多数の労働者が同一の成果を達成すべく、相互に活動するところの、資本制生産発展の特殊歴史段階としてあらわれるところの形態——この協業形態は、マルクスによると、同時に、〈社会的労働の生産性増加にふりむけられた、すべての社会制度の基礎にある普遍的形態である〉。協業の総括的性格を、かれは科学における協業をもって例証する。ここでは、10人の天文学者が各国の天文台で同じくおこなう観測、オーケストラの演奏協業などがその例。

分業を、かれは協業の生産性・相対的剰余価値の強力な手段の形態とみており、〈資本の監督の下で同一の使用価値をつくるのに、特殊な種類の労働を協働すること〉だと定義する。商品交換発生を制約する社会的分業にもとづいて、この特殊資本型の分業が発展する。二つの分業の相互関係をかれはく

わしく研究し、社会内的分業を、〈一定の関係で経済学的全範疇中の範疇〉とする。社会内的分業が商品関係一般に照応するとすれば、生産内分業は特殊資本制的形態である。生産内分業の普遍的性格にかれは言及する。というのは、それは〈生産物一般が商品として生産されることなく、生産一般が商品交換にもとづいて生じることなくして、なお存在しうる〉からだ。二分業の相互関係、とくに生産内分業が商品生産の発展に与える影響はといえば、〈資本制生産の発展にともなうのみ、はじめて商品に関して定式化された一般の諸法則が実現され、商品も真に富の普遍的な原基形態となる〉。

資本制生産過程の分業に歴史的に照応するのは特殊な生産方法としてのマニユファクチャーである。マニユファクチャー分業はもちろん、社会的タイプの分業であるが、社会における分業とは異となり、工場内の社会的分業である。同一商品をつくるための最初の労働者の結集としてのマニユファクチャー、労働手段を資本家の監督下に一人の親方の手下に集中するマニユファクチャー、これは、そのなかでの社会的分業発展にとっての、生産性向上にとっての一切の前提になるものだ。まさにこれは、家父長的作業生産に対して決定的な優位を与えると。かれは資本論第1巻よりもずっとくわしく、古代の思想家ホーマー、ツキディデス、プラトン、クセノフォン、ディオドルからはじめて、ブルジョア時代の理論家ペティ、ファーグソン、スミスなどにおける分業論の発展をフォローする。〈ギリシヤ人の見解はつねに、自己の史的裏面として、エジプトを保有してきた。そのエジプトはギリシヤ人にとっては工業国の見本であった。オランダ、後にイギリスが当時の経済学者にとってそうであったのと同じように〉。商品生産で分業を論じたブルジョア論者とはちがって、古代人は分業を使用価値の視点から考え、この過程の量的な局面よりは質的な局面に関心をもった。この意味でかれらの分析は今日にいたってもなお、その意義を失わない。けだし、それは任意の生産形態のもとで存在する分業の物象的側面にかかわっているからだ。商品生産のもとでこの側面の研究は量的側面、つまり分業が価値にいかに関与するかの研究により補足される。

機械制生産。この発生をマルクスはマニュファクチャーの胎内でフォローし、方法上大切な次のような規定を与える。〈さまざまな地質学的組成が継続的に交替するもとではそうであったように、さまざまな経済的社会構成体の形成にあたり、偶然にあらわれた特異性でひどくへだたっている時期をば信頼できない〉。ブルジョア社会を予報する偉大な諸発見——火薬、コンパス、印刷術、はたまたコペルニクスやケプラーの天文学における革命的発見——これがブルジョア社会発展の手工業期に生じたこの史実に、マルクスは注意を払った。〈ここで作用する普遍的……法則は、その後〔生産〕形態の物的可能性——技術学的条件やそれに照応する企業の経済構造が先行形態の範囲内で作られたという点にある〉。したがって、中世の会社や職場の‘不自由な’性格を一面的に論じる誤りを、かれは指摘した。〈これは労働が土地所有から解放された形態であり、無条件に、労働が社会＝政治的關係で最高の水準にある時期である〉。

機械の資本制的適用をマルクスがくわしく研究しはじめたのは51年になってからである。同年10月13日付でエンゲルスに宛て、次のように伝えている。〈…最近、書齋で仕事をしていたので、…私は主に技術学やその歴史を勢力的に研究した……〉。マルクスには技術史についての広汎な記述があるが、そのなかにはM.ポペの“科学生誕期から18世紀末までの技術史”(1807~11)の全3巻本、同じく3巻本のE.ユアー著“技術辞典”(1843~44)、I.ベグマンの5冊本“発明史”(1782~1805)が含まれていた。これらの材料にもとづいて、ノートVに機械の最初の編を書いた。63年1月この問題を補足研究して、かれは1月28日、エンゲルスに宛てて、次のように伝え送った。すなわち、機械の編で自分は若干の補足を挿入した。そこには、いくつかの面白い問題があつて、その問題をまずもって検討するのに手こずった。すべてこれを明らかにするためには、私としては技術学に関するノートをよみなおし、また地質学専門学校にウィルズ教授の労働者用・実務用(純実験用)の課程を聴講していると。

51年に、ロンドンで開催された第1回万国博覧会に関心をよせ、いまでは

55年出刊の“諸国の工業”第2巻を細心に研究した。それには〈技能・手工・機械および工業生産の現行水準の概要〉が含まれている。この概要は、51年博覧会の出品品目にもとづくものであり、当然ながら、当時の最新式の技術成果をうつしだすものであった。ポッペの作品より、マルクスは製粉業分析史のとくにくわしい叙述を入手して、〈製粉所を、…機械原理が用いられる最初のこうした労働用具として考察することができ、製粉所の歴史をもって技術学の全史を研究することができる〉ともいった。

機械制生産の技術学的前提として、マルクスは労働用具の分化・専門化・単純化を調査して、機械と用具との間のスコラ的な論争をあざ笑い、〈生産方法したがって生産関係…を変革するような適用労働手段における革命について〉と述べて、産業革命がまずもって作業機をつかまえたのだと考える。そして運動をひきおこす機械としての蒸気起動力の適用を第2の革命としてと規定し、大機械制生産に特徴的なのは自然力と科学の資本による広汎な利用だともした。57~58年手稿でかれは科学の生産力への直接の転化をみとめる。いまや規定を具体化し、〈資本制生産にしてはじめて、生産の物的過程を、生産への科学の適用に、実用に供せられた科学に転化させる〉点に注意する。この場合、資本家の側からは、人類の理論的進歩たる科学の利用があるし、科学の成果を勤労者に対抗するのにふりむけることがある。〈科学は労働にたいして、疎遠な敵対的なそしてかれらを支配する力として現象する……〉。

機械適用にもとづいた生産方法の古典的な表現は‘自動工場’にみられる。そこには、〈相互に関連する機械システムの適用〉が生じ、〈自動工場は機械システムにふさわしい完成した生産方法であり、だからそれは完成すればするほどますますもって、完成したメカニズムを形成し、個々の生産過程の遂行が人間労働の媒介をいよいよすくなくして済ませるのである〉。工場制度の分析は既刊手稿のなかにもあり、マルクスはこれを、資本制基礎にもとづく機械制生産に照応した発展せる労働組織と位置づけ、これを研究すべくエンゲルスの“イギリスにおける労働者階級の状態”（1845年）を利用した。63年4月9日、エンゲルス宛の書筒でマルクスのいうには、君の著書の重要なもの



については、すでに細部にいたるまで、44年後のいっそうの発展によって確認された。エンゲルス資料の同様な利用は第47巻のいくつかの部分に含まれている。エンゲルスはマルクスに繊維工場の作業について具体的なデータを与えた。この手稿のなかで、マルクスはエンゲルスと例のユアーとの各作品をくらべて、いずれも工場制度に関する作品中、疑いもなく、最良のものであり、内容もひとしいのであるが、ちがっているのはただ、ユアーがこの制度の召使として、とらわれた立場から発言しているのに、エンゲルスは自由な批判家としてあらわれるという点であると述べた。新機械の導入にとって最重要に前提となるのは、かれのいうように、労働条件の集中、共同にしたがっていっそう節約的にそれを協業する労働者が利用することである。〈このおかげでのみ、それらは、いっそう高い効率が労働過程において最少の費用を随伴するように利用されるのである〉。機械制生産が独立部門の協業をも生み出す傾向をかれは知っており、それが連続生産に転化することも認識していた。工場報告書から、かれは結合企業における生産の集中増大、エネルギーの集約的利用、労働力の節約利用などを結論としてひきだした。

資本主義下で機械を用いると、労働時間は絶対的にも相対的にも、大きくなる傾向がある。資本家が固定資本の補填を速めたり、そのたえざる機能を確保するために生じる、こうした傾向に結びついているのは、夜勤制の導入、労働の集約化とか濃縮化である。本手稿ではあとの問題について、資本論第1巻よりも大きな注意を払っている。マルクスによると、労働集約化が高まる結果、〈時間の空隙は…労働圧縮…により小さくなる〉そして精神的エネルギーの強められた支出、多くの精神的緊張ともども、大きな肉体的緊張が生じる。が、労働の集約とその持続性は同時に増大しない。むしろ交互に生じる。時間短縮を求める労働者の闘争は10時間労働制の採択をもたらしたが、労働集約性増大にふりむけられた工場における改善の波をもひきおこしてた。工業生産におけるこの転換は、労働者を搾取する限界を立法秩序でもって強いて確立した結果である。……と。しかしイギリス工場主の利潤は合わせて減少しなかった。集約度の増加は労働日のいっそうの短縮を命じる客観

的限度を有する。この相互関係の一般的結論を下すにあたり、マルクスは方法上重要な評注を与える。〈もちろん、つねに考慮されねばならないのは、われわれの前にある具体的な経済現象が生じるや否や、それにたいして単純にじかに、一般的経済諸法則を適用することはできぬということである〉。その場合、かれは意識的にのこす具体的問題として、たとえば需要増加、カルフォルニアやオーストラリアの金鉱発見の結果として世界市場の拡大、低価格原料を大量に輸入することなどを指摘した。この要因を考えるのは一定の研究段階では不可能であり、経済理論は原則的に具体的事象を説明するにききだつて、それを具体化しなければならない。

ところで、労働集約度の増大が社会的進歩の一条件だと考える。なぜなら、労働者のためにも自由時間をつくり、休息として作用するような人間活動の可能性をつくりだすからだ。資本主義のもとで技術的進歩がもたらすもっとも本質的な結果の一つたるものは生きた労働の機械による駆逐である。この点でマルクスは、労働者階級の相対的減少とともに、絶対的な増加をみとめた。〈労働者数は絶対的に増加するとはいへ、しかしそれは相対的に減少し、労働者の労働を吸収する不変資本にたいしてばかりではなく、物的生産に直接に関係のない、あるいはがいしてどのような生産にもしたがないそうした部分にたいしても減少するのである〉。したがって、機械の資本制的適用は客観的に労働の実質的従属の発展において新段階の出現をともなう。その段階において、労働者の過剰が大規模に作用する明確に表現される自覚的な傾向として生じて、労資の矛盾はクライマックスに達する。けだし、資本はいまや、〈生きた労働力を減価する手段としてのみならず、それを過剰にする手段として…〉あらわれるから。この傾向と同時に、これに対する機械制生産の傾向、つまり新規労働者のたえざる吸引、搾取領域の拡大が生じると、マルクスは指摘。そして、資本主義には〈労働者の生存におけるたえざる変動〉が特徴的だと。

61~63年稿はなお、マルクス・エンゲルスの経済学遺稿をすべて検討してのみ、マルクスの経済理論全ぼうの考え方が分かるのだという事実をば、確証

するものである。仕上のおわらぬマルクスの遺稿を出刊することは、かれの経済学研究の方法を学ぶためにとくに重要であり、直接的に感じたものを書きとどめているだけに、資本論にはない多くの経済学資料が含まれているし、またかれの経済理論の構造ができ上がるきわめて複雑な歴史をも再生するものである。